

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01688

研究課題名(和文) LAESを使用して高齢障害者が余暇活動を主観的に楽しむプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a program for elderly people to enjoy leisure activities subjectively using LAES

研究代表者

本家 寿洋 (HONKE, Toshihiro)

北海道医療大学・リハビリテーション科学部・教授

研究者番号：80708610

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、高齢障害者が余暇活動を主観的に楽しむプログラムを開発した。そのプログラムは、<過去・現在・未来に想いが広がる楽しさ><考える楽しさ><達成感による楽しさ><人と関わる楽しさ><心身が肯定的に変化する楽しさ>の5つの余暇活動の治療戦略と楽しさを学ぶプログラムである。このプログラムを脳卒中、骨折、心疾患、認知症高齢者に実施した結果、各々の高齢障害者が主観的に余暇活動を楽しむことができ、心身機能や活動および参加が改善した。したがって、余暇活動の5つの楽しさを主観的に楽しむ本プログラムは、様々な疾患に対応できる基礎的プログラムとして完成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまででは、過去に経験した余暇活動の楽しさを詳細に知ることのできる評価法や、余暇活動実施前・実施中・実施後において、具体的な楽しさを提供する方法論がない現状であった。

今回の研究では、余暇活動の楽しさを詳細に知る評価法を開発し、余暇活動の実施前・実施中・実施後に、具体的な楽しみを提供できるプログラムを開発した。これは、リハビリテーションの治療に難渋する高齢者や、作業機能や認知機能の改善における新たな方法論である。そして、主観的な楽しさを実感することで高齢者の潜在能力を引き出すことに成功し、リハビリテーションの治療の進歩に大きく貢献できた。

研究成果の概要(英文)： We developed a program for elderly disabled people to enjoy leisure activities subjectively. The program consists of the following five points: "The enjoyment from thoughts of enjoyment from the past, present or future", "Enjoyment of thinking", "The enjoyment achieved through accomplishment", "Enjoyment of interacting with others", and "Enjoyment by the affirmative change of the mind and body".

As a result of carrying out the program for stroke, bone fracture, heart disease, and elderly people with dementia, each elderly person with disabilities was able to subjectively enjoy leisure activities, and the mental and physical functions, activities and participation were also improved. Therefore, this program that subjectively enjoys the five pleasures of leisure activities was completed as a basic program that can deal with various diseases.

研究分野：リハビリテーション，作業療法学

キーワード：楽しさ 余暇活動 高齢者 作業機能 認知機能

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、自信を失った重度の高齢障害者が余暇活動の楽しさを実感した結果、予想外に日常生活活動が著明に改善したことを報告¹⁾した。

一方で、健康日本 21 の最終評価では、日常生活の歩数が悪化していた²⁾。つまり運動の遂行だけでは、高齢(障害)者の生活活動量が改善しないことがいえる。

そこで、余暇活動の様々な楽しさを実感することが、生活活動量の増加、要介護状態の軽減や QOL の向上につながるとの仮説を立て、本研究を開始した。

先行研究の調査では、余暇活動が『なぜ楽しいか』を検討した研究は極めて少なく、高齢者の主観的な楽しさを知る評価法がない現状であった。そこで研究代表者は、余暇活動の楽しさの詳細を知る評価法として、高齢(障害)者が過去に経験した余暇活動の楽しさが抽出できる、余暇活動楽しさ評価法(Elderly version of Leisure Activity Enjoyment Scale, 以下 LAES)の開発を開始した。

ところが、がんと脳卒中がほぼ同時期に発症し、絶望感とうつ状態が出現して作業療法の実施に難渋した高齢障害者に対して開発途中の LAES を実施しただけで、生きる希望を見出す³⁾効果が出現した。

この事実から、LAES の結果を考慮して、余暇活動を主観的に楽しむプログラムが開発できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、LAES の信頼性と妥当性を検討した後に、LAES のデータから高齢障害者が余暇活動を主観的に楽しむプログラム(以下、楽しさプログラム)を開発することである。そして、そのプログラムを対象者に実施して、どのような効果があるのかを検討することである。

3. 研究の方法

(1) LAES の信頼性と妥当性の検討

本研究の核となる、過去に経験した余暇活動の主観的な楽しさを評価できる LAES の信頼性と妥当性を検討した。

(2) LAES を使用した楽しさプログラム試行版の実施

LAES の評価結果を考慮した余暇活動を提供し、余暇活動を主観的に楽しむことによってどのような肯定的な変化が見られるかを事例で検討した。

(3) LAES を使用した楽しさプログラムの実施

LAES の調査データを使用して、楽しさの治療戦略を使用した楽しさプログラムと、余暇活動の楽しさを学んだ後に余暇活動を実施して楽しさを振り返るという 2 つの楽しさプログラムを作成して、どのような効果が生じるかを探索的に検討した。

4. 研究成果

(1) LAES の信頼性と妥当性の検討

LAES の信頼性と妥当性を検討した結果、18 項目から構成される LAES を作成した。LAES は、過去に実施した好きな余暇活動を 1 つあげて、その余暇活動の 18 の楽しさを聴取する評価法である。

表 1 は、LAES の 18 の楽しさ項目である。この項目に対して <とてもそう思う> <ややそう思う> <ややそう思わない> <とてもそう思わない> で回答する評価法である。

LAES は因子分析の結果、<過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ> <人と関わる楽しさ> <考える楽しさ> <達成感による楽しさ> <心と体が肯定的に変化する楽しさ> の 5 つの構成概念を抽出し、この 5 つの楽しさが余暇活動の楽しさの要素であることを明らかにした。

また LAES は、一定の信頼性と妥当性が確認でき、認知症を除いた様々な疾患の高齢者に適用できる LAES が完成した。

これにより、楽しさプログラムを開発するための基盤が完成した。

表1 LAES の 18 の楽しさ項目

(この余暇活動は)

思い出すだけでも楽しい
好きである
思うとやってみたくなる
準備をすることから楽しい
体を使うことが楽しい
仲間と行えるから楽しい
人と話をしながら行のが楽しい
様々なことを考えながら行のが楽しい
すること自体が楽しい
人に褒められる・喜ばれるなど人に認めてもらえると楽しい
成果を予想できるから楽しい
心や体が気持ちよくなるから楽しい
努力するとよい結果が出るから楽しい
様々なことに気づけるから楽しい
新たな仲間ができるから楽しい
自分を成長させてくれるので楽しい
創造性が広がるから楽しい
心が落ち着くから楽しい

(2) 楽しさプログラム試行版の実施

当初 LAES は、認知症を除いた評価法であった。ところが、LAES を認知症高齢者に実施して、LAES の結果を考慮した楽しさプログラム試行版を実施すると、帰宅願望や悲観的な訴えに加えて認知症の行動・心理症状(以下、BPSD)が減少した。この結果より、楽しさプログラムは認知症にも対応できる可能性を発見した。

その他に、すい臓がんの終末期の対象者、脱水症状で緊急入院した対象者、脳卒中の対象者、心疾患の対象者に対しても LAES の結果を考慮した楽しさプログラム試行版の実施で、疼痛の軽減や活動量が増加した結果を報告した。

このことから、LAES を使用した楽しさプログラムは、楽しさの5つの要素の〈過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ〉〈人と関わる楽しさ〉〈考える楽しさ〉〈達成感による楽しさ〉〈心と体が肯定的に変化する楽しさ〉を使用して作成する方向性を決定した。

(3) 楽しさプログラムの実施

楽しさの治療戦略を基盤とした楽しさプログラムの開発

余暇活動を実施する時に、〈過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ〉〈人と関わる楽しさ〉〈考える楽しさ〉〈達成感による楽しさ〉〈心と体が肯定的に変化する楽しさ〉の楽しさを提供する楽しさの治療戦略を作成した。この楽しさの治療戦略とは、主観的な楽しさを感じてもらうために、余暇活動実施前・実施中・実施後の中で対象者に楽しさを提供するための具体的な関わりのことである。表2～表6は、その楽しさの治療戦略である。

表2 過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ

- ・余暇活動の思い出やエピソードを尋ねる
- ・余暇活動の挑戦的なことは何かを尋ねる
- ・余暇活動を始めたきっかけを尋ねる
- ・楽しさを思い出するために、映像(TV・ネット・DVD)や本・写真を使用して思い出す
- ・楽しいことは忘れないと助言する
- ・余暇活動実施後に楽しさを振り返る
- ・できなくても使用していた道具に触れる
- ・なぜその余暇活動が好きかを語ってもらう
- ・昔好きだったことを思い出して、できる可能性を探す
- ・自信がない場合や下手でも実際にやると楽しくなることがあると励ます
- ・初めは大変でも、あとで振り返ると楽しい思い出になると助言する
- ・初めは難しくてもうまくできると楽しくなる
- ・楽しくなると体の痛みがあっても忘れる可能性があることを助言する
- ・体の状況の確認のために余暇活動の勧める
- ・余暇活動のことを考えるとやってみたくあると助言する
- ・体が思うように動かなくても体を動かすと楽しくなると励ます
- ・道具に触れてもらい、その感触やエピソードを語ってもらう
- ・現状でできる環境を設定する
- ・どんな道具や場所が必要か尋ねる
- ・できる・できないよりも楽しみましょうと励ます
- ・楽しいと余暇活動に集中することを助言する
- ・楽しく実施している時は疲れないと助言する

表3 考える楽しさ

- ・映像(TV・ネット・DVD)や本・写真を使用して余暇活動実施方法を考えてもらう
- ・余暇活動実施後に、さらに楽しくできる方法を話し合う
- ・余暇活動を実施中あるいは実施後に何か気づきや新しい発見があれば語ってもらう
- ・余暇活動の楽しさを生活に活かす方法を考えてもらう
- ・休息中に実施方法を考えてもらう

表4 達成感による楽しさ

- ・手や足など体を使用すると楽しくなることを助言する
- ・終わりが見えてくると楽しくなることを助言する
- ・思うようにいかないことも楽しいと助言する
- ・うまくいくと楽しいと助言する
- ・自分のイメージと結果が同じ時には楽しいと助言する
- ・展示会や大会に参加すると緊張感や反響があるので、楽しいと助言する
- ・余暇活動を写真に撮って後で見ると楽しいので写真を撮ることを勧める
- ・人にあげて喜んでくれることを想いながら作ると楽しいと助言する
- ・増えた知識や考えを語ってもらう
- ・大変だったことを語るのも楽しい思い出になると助言する
- ・成果を褒める

表5 心や体が肯定的に変化する楽しさ

- ・自分で満足できたら楽しいと助言する
- ・余暇活動ができると体も気持ちも軽くなると助言する

プログラムを実施した。具体的には、中等度認知症高齢者2名に対して、考える楽しさを取り入れた塗り絵の余暇活動と、人と関わる楽しさを取り入れた散歩の余暇活動を実施した。その結果、中等度認知症高齢者の2人のMMSEなどの認知機能や、作業機能および認知症の行動・心理症状(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia以下、BPSD)が改善した。

また、入院によるストレスにより腰背部が痛強した胸腰椎圧迫骨折高齢者には、過去・現在・未来に想いを広げる楽しさを考慮した余暇活動を提供した結果、腰背部痛が軽減し、日常生活で活動量が増加した。

さらに、頭部外傷の患者に対して、考える楽しさを提供した結果、注意機能の改善が見られ、脳卒中でうつ状態や半側無視が残存している患者に対して、過去・現在・未来に想いを広げる楽しさと考える楽しさを提供した結果、うつ状態と半側無視が改善した。

余暇活動の楽しさを学び、余暇活動の楽しさを振り返る楽しさプログラムの開発

この楽しさプログラムは、表7に示したように、様々な余暇活動の<過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ><人と関わる楽しさ><考える楽しさ><達成感による楽しさ><心と体が肯定的に変化する楽しさ>を説明して、それらの楽しさの経験の有無を話し合い、その後に余暇活動を実施して5つの楽しさを振り返るプログラムである。そのプログラムの構成は、表7のような構成となっている。

この楽しさプログラムの効果研究では、うつ状態の慢性心不全で入院中の患者に、A期(非介入期)は、好きな余暇活動である新聞読みの活動を6回実施し、B期(介入期)には、表7のプログラムを8回実施して、うつ状態の改善を検討した。うつ状態の測定指標はHADSを使用した。

1回目では、「まさに楽しい活動を探しているけどなかなか」との消極的な語りが見られたが、最後には「この学びをどこかで活かしたい」と退院後の生活の楽しみ方を考える発言が生じ始めた。

表6 人と関わる楽しさ

- ・人と関わる楽しさを実感できる人と一緒に余暇活動を実施する環境を設定する
- ・どんなタイプの人とこれまで余暇活動を楽しんできたのかを尋ねる
- ・家族で話しながら余暇活動が実施できる環境を設定する
- ・不安な時などネガティブな状況であっても余暇活動を仲間と一緒に実施すると楽しいことがあると助言する
- ・人に教える環境を設定する
- ・人に教えてもらえる環境を設定する

表7 楽しさを学ぶプログラム内容

- ・重要な活動から楽しみを見つける
- ・考える楽しさ
- ・人と関わる楽しさ
- ・達成感による楽しさ
- ・心や体が肯定的に変化する楽しさ
- ・過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ
- ・余暇活動を実施し、毎回の終了後に楽しさを振り返る

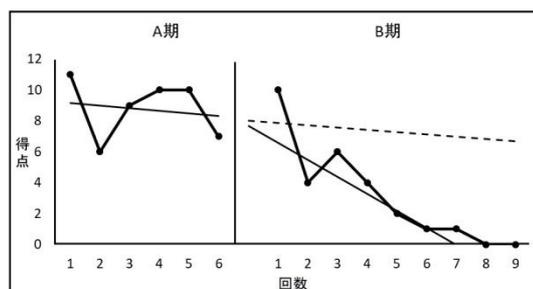
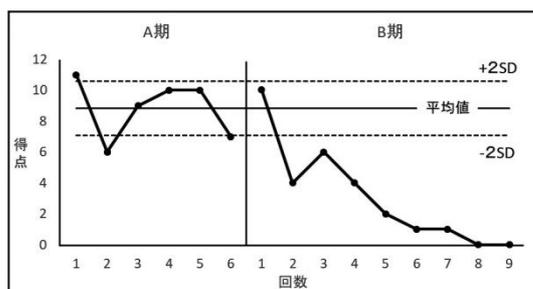


図1 HADSの結果

左が2SD帯法の結果で右が加減速線法の結果を示す
2SD帯法の点線は平均±2SD、加減速線法の点線はA期ベースラインの延長線である

HADSの結果を図1に示した。HADSは得点が高いほどうつ状態が強いのだが、A期での好きな余暇活動である新聞読みの活動では、HADSの得点は有意な変化はなかった。しかし、楽しさを学ぶプログラムを実践するとうつ状態が改善し、最終的には、HADSの得点が0点となり、うつ状態が消失した。

また、このプログラムをグループホームで生活している軽度認知症から重度認知症で構成される4~5名の小集団に対して実施した。プログラムは1回1時間の合計12回実施した。全ての対象者は、徘徊などの行動が顕著で、絶えず落ち着きない状態で生活していたが、プログラム実施中は、全12回とも最後まで席を立つことはなく、楽しさの5つの要素の経験の有無を問いかげに対しても応答が見られ、回数を重ねるたびに発言が増加していった。

表8 第1および第2ラウンド実施前後の両群のMOHOST, FIM, DBD, MMSEの比較

第1ラウンド実施前後								
	A群(実験群 楽しさプログラム群 n=4)				B群(対照群 個別プログラム群 n=4)			
	第1ラウンド 実施前	第1ラウンド 実施後	p値	効果量(r)	第1ラウンド 実施前	第1ラウンド 実施後	p値	効果量(r)
MOHOST	40.0(18.0)	46.0(6.0)	0.144	0.73	44.5(9.0)	45.5(5.0)	0.180	0.67
FIM	54.5(21.0)	72.5(19.0)	0.068	0.91	72.5(27.0)	72.5(27.0)	0.655	-
DBD	13.0(4.0)	10.0(2.0)	0.414	0.41	13.0(2.0)	12.5(3.0)	0.593	0.27
MMSE	4.0(8.0)	4.0(8.0)	0.317	0.50	11.5(3.0)	10.0(6.0)	0.180	-

第2ラウンド実施前後								
	B群(実験群 楽しさプログラム群 n=4)				A群(対照群 個別プログラム群 n=4)			
	第2ラウンド 実施前	第2ラウンド 実施後	p値	効果量(r)	第2ラウンド 実施前	第2ラウンド 実施後	p値	効果量(r)
MOHOST	45.5(5.0)	46.0(4.0)	0.180	0.67	46.0(6.0)	47.0(18.0)	0.854	-
FIM	72.5(27.0)	76.5(29.0)	0.066	0.92	72.5(19.0)	67.5(37.0)	0.285	-
DBD	12.5(3.0)	11.0(6.0)	0.109	0.80	10.0(2.0)	9.0(8.0)	0.269	0.55
MMSE	9.0(4.0)	10.5(5.0)	0.060	0.92	4.0(8.0)	4.5(9.0)	1.000	0.00

表8は、対照群（個別で好きな活動を実施する）と実験群（楽しさプログラム群）の作業機能（観察で作業機能の状態を測定するMOHOST, ADLの介助量を測定できるFIM）、認知機能（MMSE）、認知症の行動・心理症状（DBDで測定し、点数が高いほど行動・心理症状は悪化）の結果である。

この結果は、楽しさプログラム群の作業機能や認知機能および認知症の行動心理症状は、中～高程度の効果量を示していることから、楽しさプログラム群は、個別で好きな活動をする群よりも、作業機能や認知機能および認知症の行動心理症状が有意に改善していることを明らかにした。

以上の結果より、本研究では、余暇活動を主観的に楽しむプログラムにおいて、『余暇活動実施時に楽しさの治療戦略を使用する楽しさプログラム』と、『余暇活動の楽しさを学び、余暇活動の楽しさを振り返るプログラム』の2つのプログラムを開発し、脳卒中、認知症、心疾患の対象者にそのプログラムの実施によって作業機能や認知機能が改善する一定の効果を確認した。

このことから、LAESの構成概念である＜過去・現在・未来に想いを広げる楽しさ＞＜人と関わる楽しさ＞＜考える楽しさ＞＜達成感による楽しさ＞＜心と体が肯定的に変化する楽しさ＞を基盤とした2つのプログラムは、疾患を伴った高齢者に、具体的な楽しみを実感しながら作業機能や認知機能を改善できる革新的なプログラムとして活用できる可能性を見出した。

今後の研究予定としては、本研究で開発した『余暇活動実施時に楽しさの治療戦略を使用する楽しさプログラム』と、『余暇活動の楽しさを学び、余暇活動の楽しさを振り返るプログラム』について、様々な疾患特性を考慮した疾患別によつて精度の高い楽しさプログラムを開発して、その効果を検討していく予定である。

<引用文献>

- 1) 本家寿洋, 佐々木熙之, 山田孝, 運動機能障害改善に固執した高齢機能障害者の一症例, 作業行動研究, 4(1), 1997, 23-31.
- 2) 厚生労働省, 「健康日本 21」最終評価の公表(オンライン), 入手先 <<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001r5gc.html>> (参照 2020.5.15)
- 3) 日谷正希, 本家寿洋, 高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法の実施が自己効力感の改善と作業選択の支援に役立った事例, 作業行動研究, 17(3), 2014, 152-161.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石川哲也, 川又寛徳, 本家寿洋	4. 巻 22巻
2. 論文標題 退職後に趣味を見いだせないまま脳挫傷を受傷した高齢男性の余暇活動支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作業行動研究	6. 最初と最後の頁 98-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 HONKE T, Yamada T, Ishii K, Kobayashi N	4. 巻 19巻
2. 論文標題 Reliability and validity of the Japanese Elderly version of Leisure Activity Enjoyment Scale	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Journal of Japan Academy of Health Sciences	6. 最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 有田史則, 本家寿洋	4. 巻 35巻
2. 論文標題 高齢者版興味チェックリストと高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法の使用によりBPSDやQOLが改善した認知症の事例	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 74-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大山千尋, 本家寿洋, 内海久美子	4. 巻 18
2. 論文標題 中等度認知症高齢者に対する余暇活動の楽しさプログラムの探索的実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知症ケア学会誌	6. 最初と最後の頁 678-687
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計30件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西村大地, 本家寿洋
2. 発表標題 半側無視残存患者に余暇活動の楽しさを提供した事例
3. 学会等名 第28回日本作業行動学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大山千尋, 本家寿洋
2. 発表標題 心と体が肯定的に変化する楽しさの提供により退院後も作業が継続した認知症高齢者の事例
3. 学会等名 第28回日本作業行動学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日谷正希, 本家寿洋, 山田孝
2. 発表標題 考える楽しさの介入により認知機能と習慣が改善し前頭葉症状が強い頭部外傷の事例
3. 学会等名 第28回日本作業行動学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 萩原佑香, 本家寿洋
2. 発表標題 過去・現在・未来に想いを広げる楽しさにより希望が主張できた辺縁系脳炎訪問リハ利用者の事例
3. 学会等名 第28回日本作業行動学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田優樹, 小林法一
2. 発表標題 介護老人保健施設入所高齢者における余暇活動の楽しさの性質の探索的研究
3. 学会等名 第15回東京都作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本家寿洋, 山田孝, 小林法一, 鈴木渉
2. 発表標題 高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法の項目反応理論を用いた項目分析
3. 学会等名 第52回日本作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大山千尋, 本家寿洋
2. 発表標題 若年性アルツハイマー型認知症に対する「達成感による楽しさ」プログラムの探索的検討
3. 学会等名 第49回北海道作業療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本家寿洋, 山田孝, 小林法一
2. 発表標題 高齢障害者が過去に経験した旅行の楽しさの特徴
3. 学会等名 第51回日本作業療法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 本家寿洋
2. 発表標題 アルツハイマー型認知症高齢者が潜在能力として表出できる手工芸の楽しさの特徴
3. 学会等名 第18回日本認知症ケア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩岡拓人, 本家寿洋
2. 発表標題 草取り作業の楽しさを提供して認知機能や活動面が改善した事例
3. 学会等名 第48回北海道作業療法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大山千尋, 本家寿洋, 内海久美子
2. 発表標題 中等度認知症高齢者への楽しさプログラムの探索的实施と効果の検討
3. 学会等名 第18回日本認知症ケア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 萩原佑香, 本家寿洋, 馬場梨花
2. 発表標題 高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法を用いた結果, 認知機能が改善し自発話が増えた事例
3. 学会等名 第18回日本認知症ケア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大山千尋、本家寿洋、内海久美子
2. 発表標題 軽度認知症高齢者への楽しさプログラムの探索的实施と効果の検討
3. 学会等名 第6回認知症予防学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岩岡拓人、本家寿洋
2. 発表標題 作業療法を拒否した認知症高齢者に楽しさを提供し機能訓練が開始できた事例
3. 学会等名 日本作業行動学会第26回学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 日谷正希、木村徹、本家寿洋
2. 発表標題 作業歴と楽しさの評価が、脳卒中後疼痛の軽減に役立った事例
3. 学会等名 第50回日本作業療法学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山本智子、本家寿洋
2. 発表標題 新たな知識を得る楽しみが習慣化した認知症高齢者の一事例
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 日谷正希、大段裕樹、中村由美、本家寿洋
2. 発表標題 緩和ケア病棟において、人間作業モデルスクリーニングツールと高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法の利用が有効であった事例
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 岩岡拓人、片桐一敏、本家寿洋
2. 発表標題 高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法を用い、日中活動量が向上した症例
3. 学会等名 北海道作業療法学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 兼田聖那，本家寿洋
2. 発表標題 重度認知症高齢者における余暇活動の楽しさの提供は認知機能や作業機能の改善に有効か
3. 学会等名 日本作業行動学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沼田実夕，本家寿洋，定蛇ほのか
2. 発表標題 認知症高齢者に対する高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法の再検査信頼性の探索的検討
3. 学会等名 日本作業行動学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大山千尋, 本家寿洋
2. 発表標題 重度若年性アルツハイマー型認知症に対する達成感による楽しさを生きた実践
3. 学会等名 日本作業行動学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本家寿洋, 大山千尋, 山田孝, 小林法一
2. 発表標題 楽しさに関連した余暇活動の予備的分類 ~ LAESを使用した余暇活動の楽しさプログラムの開発に向けて ~
3. 学会等名 日本作業行動学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村浩明, 本家寿洋, 井口知也
2. 発表標題 過去・現在・未来に想いを広げる楽しさで疼痛が減少した事例
3. 学会等名 日本作業行動学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本家寿洋
2. 発表標題 高齢者への楽しさの実践 ~ 楽しさは高齢者が生きていくうえでの最強の概念である ~
3. 学会等名 日本作業行動学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本家寿洋, 山田孝
2. 発表標題 楽しさと価値の学びを実践したLewy小体型認知症の事例-Lewy小体認知症高齢者の作業療法治療戦略と効果に関する仮説生成-
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本家寿洋, 内藤義則, 一條紀善, 金木渉, 上野理子, 山田孝5
2. 発表標題 グループホームにおける楽しさプログラムの効果に対する予備的研究
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大山千尋, 本家寿洋, 内海久美子
2. 発表標題 若年性アルツハイマー型認知症に対する楽しさプログラムの探索的実践
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大屋里奈, 本家寿洋, 三宮孝太, 入部雅江, 小原雅彦, 松本純一, 酒井 寛人
2. 発表標題 余暇活動の楽しさプログラムを実施して慢性心不全患者の抑うつ状態が改善した症例
3. 学会等名 日本心臓リハビリテーション学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥野優輝, 本家寿洋
2. 発表標題 重度認知症高齢者に余暇活動の楽しさをういた探索的事例研究
3. 学会等名 北海道作業療法学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若杉麻希, 本家寿洋, 鈴木伸弘
2. 発表標題 楽しさの賦活によって身体的苦痛であきらめかけた最後のライブ開催が実現できた終末期がん患者の作業療法
3. 学会等名 北海道作業療法学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小林 法一 (KOBAYASHI Norikazu) (30333652)	首都大学東京・人間健康科学研究科・教授 (22604)	
研究 分担者	山田 孝 (YAMADA Takashi) (70158202)	目白大学・保健医療学部・客員研究員 (32414)	
研究 協力者	大山 千尋 (OOYAMA Chihiro)		